

## 信濃川活褶曲帯における累積変位地形の3つの特徴

### Three Features of Accumulative Dislocation along the Shinano River Fold and Thrust Zone

# 金 幸隆[1], 岡田 篤正[2], 竹村 恵二[3]

# Haeng Yoong Kim[1], Atsumasa Okada[2], Keiji Takemura[3]

[1] 京大・理・地球惑星, [2] 京大・理・地惑, [3] 京大・理・地球熱学研究施設

[1] Earth and Planetary Sci, Kyoto Univ), [2] Earth and Planetary Sci., Kyoto Univ., [3] Beppu Geo. Res. Labo., Grad. Sci., Kyoto Univ.

典型的な活褶曲帯として知られる信濃川地域において、現在から過去数十万年間の累積変位によって形成された丘陵地形と段丘面の変位の特徴に基づいて、活断層系を構造的に区分する。次に、各断層における地表変位と水系変位の特徴に基づき、累積変位としての活断層の特徴を明らかにし、活断層系における活断層と活断層の相互関係について考察した。

その結果、信濃川活褶曲帯の活断層は、単一セグメントと複合セグメントに区分された。活断層の長さ方向における累積変位の特徴としては、性質を異にする3つのパターンを認め、上下変位、側方累積型変位および側方延伸型変位に分けた。上下変位は、新旧の変位基準から見積もられる変位量分布から変位量の大きい地点において常に大きく、小さい地点において常に小さい。六日町西縁活断層の変位がこれにあたる。側方累積型変位は、古い変位基準面から判読される活断層線の末端の位置は新しい活断層線の末端よりも外側に認められる。このことは、変位が側方方向に累積していることを示唆する。鳥越断層と津南断層の活動性がこれにあたる。側方延伸型変位は、新しい活断層線の末端(tip)が古い変位基準面から判読される活断層線の外側に認められる。このことは、活断層線が側方に延伸していることを示唆している。ロサンゼルス盆地南部のウィーラーリッジ(Mueller and Talling, 1997)や信濃川活褶曲帯の片貝断層群と津南断層による変位から読みとれる。逆断層系における活断層と活断層の相互関係としては、性質の異なる3つの累積変位パターンの組み合わせによって説明できる。